



神戸女学院大学

TCM

TCM
Tokyo College of Music
東京音楽大学

音大連携による教育イノベーション

音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて

平成30年度活動報告書

平成 30 年度 活動報告書

目 次

はじめに	2
教員・スタッフ紹介・平成 30 年度活動概要	3
平成 30 年度「ミュージック・コミュニケーション講座」	
1. 第 1 回 即興音楽ワークショップの実践と、音楽家にとっての意味～「音楽」以前の「音」に気づく.....	4
2. 第 2 回 ワークショップの広がり	6
3. 第 3 回 公立文化施設がなぜアウトリーチをするのか?	8
4. 第 4 回 音の輪で繋ぐ地域の魅力～音楽と地域資源のコラボレーション事業について～	10
5. 第 5 回 ワークショップと学習論	12
6. 第 6 回 ワークショップの手法と意義	14
7. 第 7 回 即興は怖くない!～カンタンなパターンですぐできる!即興が面白くなる秘訣～	16
8. 第 8 回 シェイクスピアの作品を用いたインタラクティブ・コンサート～音楽劇「ロミオとジュリエット」.....	18
9. 第 9 回 神戸女学院大学 実習報告会	19
10. 第 10 回 インタラクティブ・コンサートの実践例～弦楽四重奏による参加型コンサート	20
11. 第 11 回 東京音楽大学 実習報告会	21
12. 第 12 回 ワークショップの実践報告および総括	21
各大学実習報告	
1. 東京音楽大学 音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」@大宮	22
2. 東京音楽大学 音楽ワークショップ 第 9 回みないけキッズアーティスト「はじけるリズム♪」.....	23
3. 東京音楽大学 音楽ワークショップ@エル・システム ジャパン 駒ヶ根 夏季学習会	24
4. 東京音楽大学 「音楽ワークショップ特別セミナー」ならびに 「おんがくづくりワークショップ イギリスのせんせいたちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう」.....	25
5. 東京音楽大学 音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」@久喜	28
6. 東京音楽大学 第 4 回インタラクティブ・コンサート「音が伝える物語」.....	29
7. 神戸女学院大学 「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第 9 回「音で遊ぼう!子どものための音楽作りワークショップ」.....	30
8. 神戸女学院大学 トマス・カバニス氏によるワークショップ研修 「ティーチング・アーティストってなんだろう?」.....	34
おわりに	36

はじめに

共同プロジェクト「音大連携による教育イノベーション：音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」も今年度が10年目となりました。2009（平成21）年度の文部科学省「戦略的大学連携支援プログラム」に採択された時、3年間の補助期間のみの連携ではなく10年は継続するようと言われて、そんな無茶なと驚きましたが、コツコツと続けている内に、それを達成してしまいました。当時、採択された他の連携プログラムがどうなっているか寡聞にして知りませんが、この連携プロジェクトを長期にわたって続けて来ることができたのは、両校の信頼関係によるものと感謝しています。

今年度の「ミュージック・コミュニケーション講座」では、東京はワークショップの理論面と実践面の二面でそれぞれ活躍されている講師陣を揃え、神戸は関西のワークショップの現状を把握するべく、各界で要として活躍している方々をお招きしてお話しを頂きました。

秋には、ロンドン・ギルドホール音楽院修士課程リーダーシップ・コース修了生の2名を英国から招聘して、「音楽作りワークショップ特別研修」を東京と神戸で実施しました。講師も受講生もリピーターとして回を重ねる度に理解が深まってきているのは嬉しいことです。

今年度も、さまざまな形で活動を理解して支えて下さった皆様に、心より御礼申し上げます。1年間の活動内容をまとめた本報告書を、音楽・芸術・教育に関わる方々に広くご高覧頂き、未来に向けてのご助言を頂きましたらありがたく存じます。

2019（平成31）年3月

津上智実（神戸女学院大学・教授）

*開講科目名

ミュージック・コミュニケーション講座A・B（東京音楽大学）

ミュージック・コミュニケーション講座（神戸女学院大学）

教員・スタッフ（平成31年3月現在）

東京音楽大学	武石 みどり 磯野 恵美 坂本 夏樹	東京音楽大学音楽学部	教授 連携センタースタッフ 連携センタースタッフ
神戸女学院大学	津上 智実 朝山 加奈子 遠藤 紀子	神戸女学院大学音楽学部	教授 連携ルームスタッフ 連携ルームスタッフ

平成30年度の活動

●ミュージック・コミュニケーション講座の実施

いずれもインターネット・ビデオ会議システムにより、2大学間を結んで実施。

オリエンテーション：平成30年4月20日（金）	発信校：東京音楽大学
第1回：平成30年4月27日（金）	発信校：東京音楽大学
第2回：平成30年5月11日（金）	発信校：神戸女学院大学
第3回：平成30年6月8日（金）	発信校：神戸女学院大学
第4回：平成30年6月29日（金）	発信校：神戸女学院大学
第5回：平成30年7月20日（金）	発信校：東京音楽大学
第6回：平成30年10月5日（金）	発信校：神戸女学院大学
第7回：平成30年10月19日（金）	発信校：東京音楽大学
第8回：平成30年11月16日（金）	発信校：東京音楽大学
第9回：平成30年11月30日（金）	発信校：神戸女学院大学
第10回：平成30年12月7日（金）	発信校：東京音楽大学
第11回：平成30年12月14日（金）	発信校：東京音楽大学
第12回：平成31年1月18日（金）	発信校：東京音楽大学

●その他の活動

平成30年6月23日（土）於：埼玉県大宮市立大宮東小学校
音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」

平成30年7月31日（火）於：区民ひろば南池袋
音楽ワークショップ第9回みないけキッズアーティスト「はじけるリズム♪」

平成30年8月18日（土）於：長野県駒ヶ根市文化会館
エル・システム ジャパン駒ヶ根 夏季学習会「音楽ワークショップ」

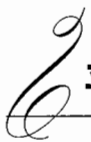
平成30年9月7日（金）～10日（月）於：東京音楽大学
「音楽ワークショップ 特別セミナー」ならびに「おんがくづくりワークショップ イギリスのせんせいたちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう♪」

平成30年10月20日（土）於：埼玉県久喜市立三箇小学校、菖蒲東小学校
音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」

平成31年2月21日（木）於：区民ひろば南池袋
第4回インタラクティブ・コンサート「音が伝える物語」

平成30年9月12日（水）～15日（土）於：神戸女学院大学
「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに第9回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

平成31年3月8日（金）於：神戸女学院大学
トマス・カバニス氏によるワークショップ研修「ティーチング・アーティストってなんだろう？」



平成30年度 第1回「ミュージック・コミュニケーション講座」

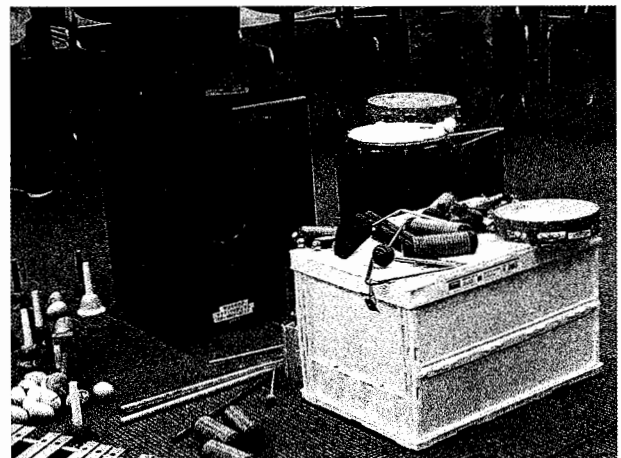
<p>講座の名称</p>	<p>第1回ミュージック・コミュニケーション講座 「即興音楽ワークショップの実践と、音楽家にとっての意味 ～「音楽」以前の「音」に気づく～」</p>
<p>講師</p>	<p>鈴木潤（ピアニスト・作曲家）</p>
<p>実施日時</p>	<p>2018年4月27日（金）14：10～15：30</p>
<p>実施場所</p>	<p>東京音楽大学 A地下100教室</p>
<p>講座の概要</p>	<p>鈴木潤氏はレゲエの分野でピアニストとして活動し、その後編曲・作曲の分野にも活動範囲を広げられた。並行して保育園・小学校・特別支援学級・高齢者施設などで音楽ワークショップを行い、独特な「放置型即興」（音の砂場・音の運動会）で知られる。音楽の知識や技能を強調するのではなく、参加者を「あるがまま」にさせたままで見えない縛りから解いていくワークショップの手法について、実践的な講義をしていただいた。</p> <p>パワーポイントと映像を用いてワークショップの活動の概要と実例について紹介されたのち、実際に各大学の教室の中で「音の砂場」を体験した。これは、各自が好きな楽器を選んで自由に音を鳴らしてみることに他ならない。その様子は、あたかも砂場で子どもたちが各々好きな形を造るのに専心する姿に似ている。砂場では、特に上からの指示はなく各自が自分のテンポで造形を続け、時には自分で造ったものを破壊し、また時にはそれぞれ別に造ったものが関連づけられる。「音の砂場」の場合には、さまざまな音が同居するカオス状態が続く中で、リーダーはそれぞれの人が出す音を拾い上げ、模倣や応答をしながらコミュニケーションを図る。15分～30分間経過するうちに、参加者がお互いの音を聴くようになってくると、自然に音楽的な秩序やまとまりが生まれてくる。リーダーが何かを教え込むのではなく、各自が自発的に発する音を素材として捉え、「お互いに聴きあう」力を誘発する役割を果たす。</p> <p>幼稚園や学校では、楽器の鳴らし方や演奏のタイミングまで決められており、自由に音を出す楽しさの優先順位は低い。そのような環境の中で「音の砂場」を実践したときに、その意義を疑問に感じ、音の洪水にとまどう教員もいる。しかし、ふだんの授業や生活では見られない生き生きとした子どもたちの姿や思いがけない発想力・積極性が、「放置型即興」の効果を実証しているのである。秩序だった音を楽譜通りに弾くことを日常としている音大生にとっても、「音の砂場」は音楽の原点について再考し、人に音を伝え、人と音を共有することについて思いを致す生産的な機会となる。</p>

〈学生のことば〉

- ・音の砂場を初めてやってみて、自由に楽器を使い、自由に楽器を鳴らすことがとても大変だと感じました。他人と会話しながら楽器を自由に弾くのはとても楽しかったです。（東京/ピアノ/1年）
- ・話を聞くことが中心の授業かと予想していましたが、体験することで楽しく、より実践的に学ぶこ

とができました。音の砂場は楽器や音に触れる事が目的だと思います。しかし、1人1人の自由に出す音が徐々にきれいになっていき、最終的に1つの作品になる、その過程や体験は教育の1つなのだと感じました。強制されなくても各々が音に興味を持ち、そこから人への関心へも繋がる過程を自分自身今回の体験を通して学ぶことができました。（東京/ミュージック・リベラルアーツ/1年）

- ・私は幼稚園生、小中学生の時に、楽器を使うことになったら毎回音が鳴り止まないことが嫌だったけれど、今回の「音の砂場」を通して、受け入れること、そこから音楽を生み出すことができる楽しさを知れてよかった。身体を使って表現するのは恥ずかしいし苦手ではあるけれど、自分のパフォーマンスに活かせたらいいなと思う。
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)
- ・とても楽しく受講させて頂きました。印象に残っていることは、うるさい子、少し落ち着きがない子どもに対して、その子よりもあばれると、その子が静かになるということです。また、音の砂場も興味深かったです。
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)
- ・鈴木先生のワークショップを始めたきっかけやそれまでのプロセス、そして具体的なワークショップについて学ぶことができ非常に面白かったです。特に、実際のワークショップでの様子や受けている方達の反応、それに対する行う側の対応など詳しく聞くことができ興味深いと思いました。私たちが音楽を用いてできることがたくさんあり、一方的にならず、聴いてくれる人も一緒に巻き込んで音楽の世界を体感できる、そんな様々な可能性を感じることができて嬉しかったです。
(東京 / 声楽 / 2年)
- ・音の砂場、初めてやりましたが、とても新鮮で楽しかったです。いろいろなゲームができ、また講師の先生のお話も伺えて、すごく充実していました。
(東京 / 音楽教育 / 3年)
- ・音の砂場では自分の気が済むまで楽器を演奏することで、授業でするマニュアル通り（楽譜・練習曲）以外の音が鳴ったりして、新しい発見がありました。こどもの成長のためにはやり方を教えたり、転ばぬ先の杖をするのではなく、まず自分たちで、何でもやらせてみるのが大事なのだなと思いました。
(神戸 / 声楽 / 1年)
- ・思うままに楽器を鳴らすことをするのは、幼少期に戻ったようで楽しかったし、小さい子たちは、今の大きくなった私たちが感じなくなった楽しさを体験しているんだ、ということが分かりました。「音楽の原点」という感じがしました。反面意外と感じるままに音を出したり、動いたりすることは難しいと思いました。
(神戸 / 声楽 / 2年)
- ・とても楽しく受講することができました。音楽を奏する前に音と触れ合うことで、楽器の持つ音色や特性を自然と知ることができるようになるのだと気づかされました。また、音の砂場と称して、好きな楽器を取って演奏してみると、童心に戻って楽器と触れ合うことができました。
(神戸 / ピアノ / 4年)
- ・鈴木先生の講座は私がイメージしていたものと全く違いました。「スイッチ」は楽器を使わずに自分自身の身体を使うことに驚きました。良い意味で頭を使わずに楽しむことができました。「音の砂場」は全て自由の時間であることに衝撃を受けました。その自由の中で自分たちでルールを作ったり、童心に戻りました。新鮮でとても勉強になりました。
(神戸 / 声楽 / 1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。

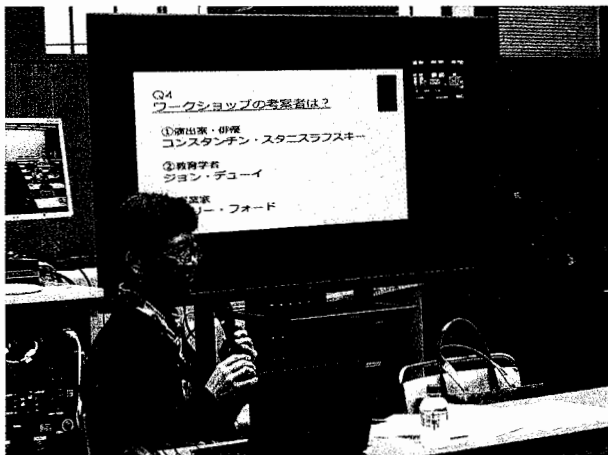
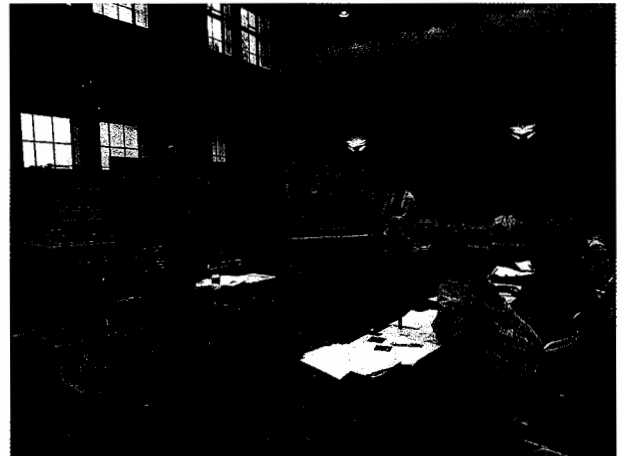


平成30年度 第2回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第2回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップの広がり」
講師	佐藤 千晴（フリージャーナリスト）
実施日時	2018年5月11日（金）14:00～15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第2回の講座は、大阪アーツカウンシルでディレクターを務めた佐藤千晴氏を講師に迎えて、神戸女学院大学から発信した。</p> <p>自己紹介の後、付箋を配り、今まで受けてきたワークショップを書き出すように指示を出された。全員が書いたものを貼り出して共有したところ、音楽や美術や演劇など、ワークショップには様々なジャンルのものがあることが改めて分かった。それぞれのワークショップが何を目的とし、どんなタイプのワークショップであるのかを、この授業の最後に分類できるようにしようと呼びかけた。</p> <p>次に、ワークショップについてのクイズが出され、東京と神戸で点数を競い合った。クイズでは「ワークショップとは何か?」「ワークショップが発祥した国はどこ?」「ワークショップはいつから始まったか?」などが問われ、受講生たちは楽しみながら参加し、ワークショップの基本知識を学んだ。クイズの結果から、「ワークショップとは20世紀初頭にアメリカで体系化された、グループでの学びと創造である」とまとめられた。また、ワークショップでは5つの大切な要素「参加、体験、協働、創造、学習」があると述べられた。この5つの要素を持ったワークショップが展開される場は多岐にわたり、小学校の総合学習や町内会、ビジネスでの研修会など様々な場面で応用されている。</p> <p>その後、日本でのワークショップの事例として、演劇ワークショップを20年以上続けている平田オリザ氏のワークショップでの演劇作品作りが紹介された。演劇という技法は、様々な人の意見を聞き、合意を形成していく能力を楽しみながら身につけていくことができる。一方、クラシック音楽の分野ではどんなワークショップが展開されているのか、日本センチュリー交響楽団と大阪の就業支援施設が共同で行った就業支援のワークショップを例として紹介された。「オーケストラの新しい価値を創造すること」「オーケストラの社会的な役割を改めて考えること」を目的とし、オーケストラが就労支援を行っている。</p> <p>このように、ワークショップが広がる背景には、社会が多様化したという要因がある。全員が対等であり、アイデアを出し合って一つのものをつくっていくワークショップは、共生社会を築くために大変有効な手段である。また、芸術・文化を取り巻く環境も変化し、ただ鑑賞しているだけでは飽き足らない人が増え、参加型の芸術プログラムが増加している。</p> <p>最後に、受講生が今まで受けたワークショップを5つの要素「参加、体験、協働、創造、学習」に分類することになった。分類してみると、「協働」に当てはまるワークショップのものが少ないことに気づいた。音楽系のワークショップに偏ってしまいがちになるため、大学を出て色々な分野のワークショップに参加してみようことを勧められた。ワークショップの経験の少ない学生にとっては、ワークショップとは何か、何を目的としているのかを知ることができたのではないだろうか。</p>

〈学生のことば〉

- ・ワークショップを作るときに、受ける人に何を知らせてもらいたいのか、何のためにそのワークショップを受けてほしいかをちゃんと考えて作るようにしたい。(神戸/ヴァイオリン/2年)
- ・この先ワークショップをする際、「参加・体験・学習・創造・協働」の5要素を組み入れること、参加者が対等に接し合える内容にすることを考えて活かしたいです。(神戸/声楽/1年)
- ・ワークショップというものを分類分けしたのは初めてでした。ワークショップを改めて見つめなおすことで、何を目的としているのかが少しずつ見えてきました。ワークショップの歴史もクイズで教わり、とても勉強になりました。(神戸/声楽/1年)
- ・クイズで歴史を少し学んだので、もっと詳しく学びたくなりました。ワークショップのことを深く知って、分類分けや何を目的とするのかを、自分がワークショップをするときに活かしていきたいです。(神戸/声楽/1年)
- ・音楽の持つ力は実に様々で、それは一般的なコンサートだけでは発揮しきれないと思います。社会といかに関わるかで、その価値も変わっていきますし、発信する立場でも新たな可能性を模索する必要があると思います。ワークショップはその実験の場になると思います。これから授業での実習で探っていくことになりますが、ワークショップを行う意味、はたらきを理解した上で体験したいと思います。(東京/ピアノ/1年)
- ・これまでの授業では主に音楽に関するワークショップについて学習してきたので、ワークショップ=音楽という結びつけをしていましたが、言葉の意味も広く、内容や役目も様々であると分かりました。ワークショップの要素の「参加」「協働」「創造」、さらに「主体性」や「他者理解」を、体験を通して学べる機会は少ないと感じます。これからは特に社会で生きる上で必要なことだと思いますし、だからこそその機会が求められているのだと思いました。(東京/声楽/2年)
- ・ワークショップとは何をするか、どうやって行するか、実際に体験して学ぶことが多かったですが、その為に必要なことや今の状態になるまでの経緯など、具体的に行うには何が重要であるかを学ぶことができ、非常に面白かったです。(東京/声楽/2年)
- ・ワークショップの定義など知らなかったことを知ることができたので、ワークショップ自体を理論的に理解して、今、自分たちが計画している企画にも反映していきたい。(東京/ミュージック・リベラルアーツ/1年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。



平成30年度 第3回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第3回ミュージック・コミュニケーション講座 「公立文化施設がなぜアウトリーチをするのか？」
講師	衣川 絵里子（西宮フレンテホール副館長、相愛音楽大学マネジメント学科非常勤講師）
実施日時	2018年6月8日（金）14：00～15：30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第3回の講座は、西宮フレンテホール副館長で相愛音楽大学マネジメント学科非常勤講師の衣川 絵里子氏を講師に迎えて、神戸女学院から発信した。</p> <p>衣川氏は、幼少期にヤマハで作曲を学び、楽器の構造や楽譜などにも興味を持っていた。神戸大学発達科学部でアナリーゼを専攻し、アートマネジメント研究会でコンサートの制作を学んだことが、現在の活動につながっている。</p> <p>まず学生たちに、全国にいくつ公立文化施設があるか問いかけた。現在、全国公立文化施設協会に登録されているものと、登録されていないものを含め、およそ4000館あり、ホールが多数建設された1990年代には、1週間に2館ずつ建てられ、オープンしていた事実に学生たちは驚いていた。</p> <p>公共文化施設がアウトリーチをはじめた最初は、集客に苦戦するホールを応援するため、一般財団法人地域創造が打ち出した「音活（おんかつ）」だった。衣川氏が事業の企画・制作等を担当していた神戸市灘区民ホールでは、2013年度から5年間で延べ10,490名、全122回、子どもたちが芸術文化に触れるため学校を訪れ、「初めての出会いを最高の出会いに」をスローガンに、音楽芸術に対する「食わず嫌い」を減らそうと、ワークショップを企画した。スライドを観て、衣川氏の地域や子どもたちに対する熱い思いに、学生たちは感動していた。また他に落語家、画家、書道家、ミュージシャン、バレエダンサー等々さまざまな芸術家を招いて、興味深いワークショップを数多く行った。また資金を集めるため、半分は文化庁からの補助金、残りの半分はクラウドファンディング（インターネット経由で、人々や組織に資金の協力をを行うこと）を利用し、約30万円を集めたという苦労話も聞いた。</p> <p>次に、衣川氏がいつも授業をするときに心がけている、「6W2H」（なぜ・誰が・誰に・いくらで・いつ・どこで・何を・どのように）について語られた。アウトリーチに限らず、どんなシーンにおいても使えるので、今後利用したいという声があがった。</p> <p>これからワークショップをする際に、今日学んだことを活かして、楽譜が読めない子どもたちに○△□などの記号やシールを利用したり、最初の5分で子どもたちの心をつかめるように工夫したいという声もあがり、学生たちにとってたくさんの気づきや共感を呼んだ講座になった。最後に衣川氏は、いろんな施設の人々が、それぞれの思いでアウトリーチをしているので、是非もっと公共の文化施設に足を運んで欲しいと締めくくった。</p>

〈学生のことば〉

・とても理論的に考えたり分析して、ワークショップを企画しているのだなと思いました。自販機のお金を資金にしていたことに驚きました。劇場などでの催しに行くかどうかは、親の影響が大きい

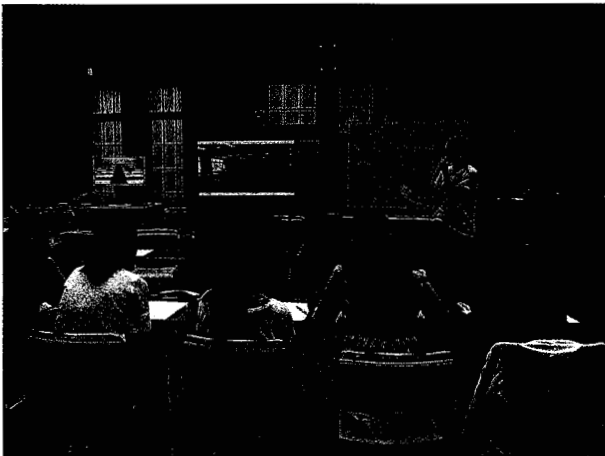
かなと思いました。 （神戸 / ピアノ / 1年）

・アウトリーチの最初の目的は、「クラシック音楽の普及」であったことは知っていましたが、どんどん変化しているなども感じました。演奏者自ら

が内容を考え、聴き手とコミュニケーションをとることは、普通のコンサートにはないことなので、より色々な人と近づけるよう、心がけることが大切だと思いました。(神戸/声楽/4年)

- ・「公立文化施設」の歴史や文化施設のことなど、知らないことが沢山あることに気づかされて、とても勉強になりました。今回の講座で得たことを忘れず、今後アウトリーチをする機会があれば「6W2H」を利用したいです。(神戸/声楽/1年)
- ・ワークショップを企画する際、「なぜ・だれが・だれに・いくらで」を優先して考えて、明確なイメージを大事にしようと思いました。最初の5分で子どもの心をつかめるように、工夫しようと思いました。(神戸/声楽/1年)
- ・子どもたちや地域の方々に喜んでもらえるように、楽しんでもらえるようにという思いが、話を聞いていて伝わりました。(神戸/声楽/2年)
- ・教育機関におけるアウトリーチの目的として、「初めての出会いを最高の出会いに」というのを目的としていることを聞き、教師が生徒に授業をすることと共通点があると思いました。教師が生徒に教えることも、アウトリーチと同じ「参加を強制されている」と思っていて、特に音楽の初めの導入が、とても大事だと考えています。先生の行っているアウトリーチに興味を持ちました。(東京/音楽教育/3年)

- ・アウトリーチを行う最初の目的から現在の目的へ、時代に合わせて変わっていることを知り、対象や内容に応じて、企画を考えることの大切さを感じました。また、公共文化施設がアウトリーチを行う理由として、クラシック音楽の普及だけでなく、市民にとって価値のある場所を目指すためにも、このようなことを行っていることが分かりました。(東京/ピアノ/1年)
- ・自分も「芸術鑑賞会」を経験しました。開催されるまでに、企画する方、アーティストの熱い思いがあったのだと改めて気づきました。しかし金銭的な課題で、断念せざるを得ない状況だと聞きました。地域によって力を入れる分野は違いますが、ぜひ子ども達が芸術文化に触れる機会が、さらに増えて欲しいと思います。(東京/ピアノ/1年)
- ・先生の立場になって授業を行う際に、どのようにしたら、子どもたちの興味を引くことができるか考えたいと思いました。また、最初が肝心だと学んだので、どうやって初めに相手の心をつかむかが、とても重要だと思いました。(東京/音楽教育/3年)
- ・アウトリーチの方法論の中で、例として挙げられていた“落語”の話で、5分小話、5分解説、10分体験、20分鑑賞の構成で、子どもたちが積極的に参加してくれたということで、私自身、教育専攻として魅力的に感じました。是非、参考にしたいと思いました。(東京/音楽教育/3年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。



平成30年度 第4回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第4回ミュージック・コミュニケーション講座 「音の輪で繋ぐ地域の魅力～音楽と地域資源のコラボレーション事業について」
講師	稲本 渡（クラリネット奏者、株式会社音屋組 代表取締役）
実施日時	2018年6月29日（金）14：00～15：30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第4回の講座では、クラリネット奏者で株式会社音屋組の代表取締役も務める稲本渡氏を講師に迎えて、神戸女学院大学から発信した。</p> <p>まず、自己紹介の後、株式会社音屋組を設立するきっかけや事業内容が話された。音屋組では、若手音楽家の育成や、プロデュースしたオーケストラの全国ツアーなどを行っている。大事にしていることは、「目的を決めること（＝どのような趣旨で、どんな結果を生み出すのかを考える）」「付加価値をつけること（＝一般の客層が行ってみようと思うように工夫する）」「WIN-WINの関係を目指すこと（＝主催者やスポンサーにメリットがあるようにする）」だと語った。</p> <p>次に、音屋組が取り組んでいる地域資源と音楽とのコラボレーション事業の一例が紹介された。五感を使ったイベントを実施するにあたり、まず「地域に眠るお宝探し」を行っている。路面電車の中でのコンサートでは、車庫見学も取り入れ、鉄道ファンも楽しめるように工夫し、日本庭園でのコンサートでは、散策しながら楽しめる野外コンサートとした。たくさんのお客さんをお招きするコンサートホールでの事業では、空間デザイナーや竹細工の芸術家とコラボレーションした「堺輪音シリーズ」を企画し、地場産業によるロビーでのイベント限定の物販も行った。売り上げ状況に応じて、司会者がコンサート会場で商品の宣伝も行うなどの連携をとり、商品売り上げの何割かを出展料として主催者がもらう仕組みにし、両者にとって利益があるように運営している。また、コンクールの事業においてはスポンサーをとることが大切で、地域や企業をいかに巻き込むかを考える必要があると語った。</p> <p>受講生からの「なぜ、五感を使ったコンサートに力を入れているのか？」という問いに対しては、「音楽だけを宣伝してもチケット販売数が伸びなかったため、食べ物など一般の人が親しみやすいものとコラボレーションしている」と話された。</p> <p>次に、「あなたの地域に眠るお宝探し」と題し、受講生自身の住む地域のロケーション・名産品・デメリットを考え、発表し合った。受講生からは、お寺や商店街など色々な場所や食べ物が挙がり、盛り上がった。講師からは、公園や牧場など、様々な場所でのコンサート経験をふまえながら、「何でもコンサートに結びつけていくといい」とアドヴァイスがあった。</p> <p>最後に、「自分の出演料の設定の仕方が分からない」という学生の疑問に対して答えを話された。出演料を設定する目安としては、自分はどれだけの集客ができるのかがポイントになると答えた。質疑応答の後、「皆さんのこれからの役に立てば」と、講座を締め括った。</p>

〈学生のこぼ〉

- ・五感をコンサートの企画の際に取り入れて考えるという発想力に驚きました。芸術音楽と商業音楽

では、ずいぶん一般の方の関わりやすさが違うので、他の分野とコラボしたコンサートをどんどん増やせば、クラシック愛好家が増えるので

はないかと思いました。コンサートを企画する上で一番大事なのは目的（大義名分）なのだと思います。（神戸 / 声楽 / 1年）

・地元で何かコンサートを行うとき、その土地の特徴について調べ、何にでも結びつけて、まず考えてみようと思います。関わる人が全員 win-win になるように企画することを心がけたいと思います。（神戸 / 声楽 / 1年）

・コンサートをやるにあたって、目的を決める内容が「地域の活性化」であったり、「付加価値の創造」を考えたり、五感のコラボレーションに気がついたり、稲本先生の発想力が凄すぎて勉強になりました。新しく学ぶことばかりだったので、とても面白かったです。（神戸 / 声楽 / 1年）

・自分の住んでいる場所付近の名産と音楽をつなぐという発想が私にはなかったので、とても新鮮でした。電車の中でのコンサートの話が興味深かったです。（神戸 / 声楽 / 4年）

・クラシック音楽だけでなく、音楽自体好きではない人もいることを考えなくてはならないと思いました。興味を持ってもらう方法として万人が興味のあるようなものと一緒に音楽を楽しんでもらえるような企画を考えて行かなくてはと思いました。実際に企画し、お客さんを入れて行うにあたり、自分が今やっている企画案よりも考えることは多く、企画内容以外のことも考えていかなければならないと実感しました。今後は、その部分についても考えていきたいです。（東京 / ピアノ / 1年）

・地域の特徴を活かしたコンサート、イベントとい

うのが面白く、自分でも色々と発見・考察してみたいと思いました、その土地の特色を活かせるイベントを行えるように工夫してみたいです。特にお客様に参加してもらってワークショップで何かもっと地域に密着したものを研究してみたいと思いました。（東京 / 声楽 / 2年）

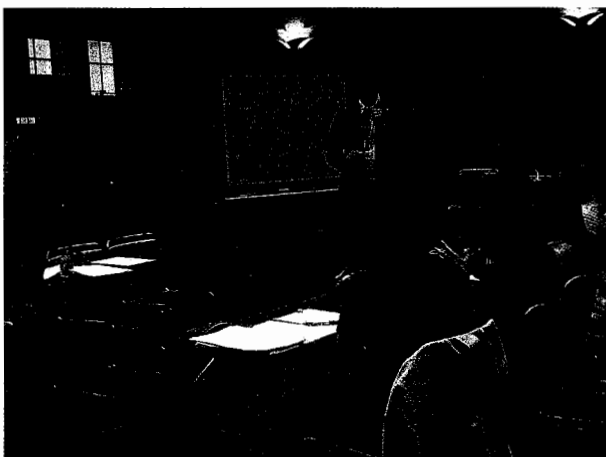
・現在、授業内で音楽ワークショップの企画と開催を目指して活動しています。企画を考える中で何か面白いことをやろうといった思いが先行してしまい、参加者の立場を忘れてしまうことが多々あります。企画者は企画を行うことだけに意味を見出すのではなく、何か付加価値をつけることで参加者に楽しんでもらい、与えられるものがあるとよいと思いました。エンターテインメントには様々な要素が必要だと気付いたので、より多角的なアプローチを意識して取り組んでいこうと思います。（東京 / ピアノ / 1年）

・演奏企画に必要な要素を地元の有名な場所や名産品から取り出すなど、とても自分の幅が広がった。目的、ターゲット、場所、収支、内容、付加価値、後援者など色々なことを考える必要があるが、企画側も参加側も付加価値に重きを置くべきだとわかった。

（東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年）

・音楽の輪で繋ぐ地域の魅力、目的や工夫など具体的に例を出して説明して頂き、とても分かり易かったです。コンサートの中身作りについては、これから色々企画をしていくときに役立つと思いました。

（東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年）



※写真は神戸女学院大学での様子です。



平成30年度 第5回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第5回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップと学習論」
講師	荻宿 俊文（青山学院大学社会情報学部教授）
実施日時	2018年7月20日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 A地下100教室
講座の概要	<p>本講座で取り組もうとしているワークショップとは何なのか、という「そもそも論」から始めて、教育学の立場からワークショップの歴史と理論的裏付け、実践の可能性について論じられた。</p> <p>ワークショップというと実践的な学習全般を指すような印象があるが、ワークショップという言葉は20世紀の初頭、「話し合いにより自分たちで解決する」討論による教育を指すものとして生まれ、「自分の意見をもつこと」「正解ではなく納得解を求めること」を重視するものであった。私たちが音楽ワークショップを企画・実践する際にも単に楽しさをめざすのではなく、こうしたワークショップの基本理念をよく心得ておく必要がある。</p> <p>ワークショップは、コミュニティ形成のための他者理解と合意形成をトレーニングする場である。したがって音楽を通して音楽そのものを学ぶのではなく、本来人間に埋め込まれている協働性・即興性・身体性といった要素、すなわち学校教育の中で教えられる度合いが少ないが、今後の高齢化・多元化社会の中で必要とされる要素を身に着けることをめざす。このような形でワークショップを学習として捉えるならば、それは知識や技能を身に着ける学習ではなく、経験を他の人と分かち合うことを重視する学習である。「人と一緒にいることで、一人ではできないことができるようになってきた」というところにワークショップの楽しさがあるのであり、その感覚を味わわせるためには、ワークショップで取り組む内容を「発達の最近接領域」に設定することが有効である。すなわち、一人ではできないが補助者や協力者がいればできるような具体的なモデルを工夫し、組み合わせることである。</p> <p>ワークショップを新しい学習の型として広めていくためには、地域社会や学校と連携した継続的な取り組みが必要である。また実践と並行して、ワークショップによる学習にどのような意義があるのかを広く、かつわかりやすく発信していく必要がある。確かに本講座で音楽ワークショップの企画・実践を学んだ学生たちにとって、活動の場を創生し、また自分たちの活動について理論的裏付けをもって語れることが、卒業後の大きな課題と言えよう。</p>

〈学生のこぼ〉

- ・ワークショップの役割についてとても具体的に、わかりやすく教えて頂きました。なるほどと思うことが多く、とても楽しかったです。特に、正解と納得解の話や、ヴィゴツキーの最近接領域説が興味深いと思いました。
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)
- ・ワークショップを企画するにあたり、納得解の大

- 切さを再認識することができ、重要性を感じました。教育的にも社会的にも発達の最近接領域が大切であることを知り、その部分を生み出せるような企画を考えていきたい。(東京 / ピアノ / 1年)
- ・音大、美大は社会が尽力して成り立っているものなので、簡単な理由で専門の道をあきらめるのは社会的損失であることを初めて知った。
(東京 / ヴァイオリン / 1年)

- ・ワークショップが加点法なのはすごく素敵なことだと思いました。たしかに、この世の中は減点法が多いが、100点までしか取れないことが当たり前じゃないと思いました。

(東京 / 音楽教育 / 3年)

- ・ワークショップのそもそも論が非常に面白かったです。ワークショップについてなんとなくのイメージは持っていますが、それをしっかりと再確認することができました。ワークショップのはじまり、特に前提として「正解<納得解」ということがとてもしっくり来て、なるほど!と思いました。教えこむ (teaching) のではなく (leading) すること、この二つの違いや重要性を改めて感じています。それから身体性、即興性、協働性についても面白かったです。普段の生活や音楽の中で意外と使っているものたちで、これをワークショップに使わない手はない!と思いました。

(東京 / 声楽 / 2年)

- ・グラフを使っただけの説明や心理論のような内容も入っていて、用語は難しかったけれども、すごく分かりやすく理解することができました。また例えとして子どもの遊具があったりして、内容が頭に入りやすかったです。もう少し講座を聞きたかったです。

(神戸 / 声楽 / 1年)

- ・現代社会では、模範解答を答えることが暗黙の了解となっていますが、ワークショップでは自分が納得した答えに意味があるということを伝える特質があるので、本来人間として大事な「自身の中に確固とした意志、意見を持つ」ことを促せるのだなと思いました。

(神戸 / 声楽 / 1年)

- ・久しぶりの東京からのMC講座だったからか少し緊張しました。話の内容が、少し言葉が難しかったからか理解するのに時間がかかりました。レジュメをいただきたいです。内容はとても興味深かったです。

(神戸 / 声楽 / 4年)

- ・何か課題を達成させることが目的のワークショップでは、具体的なモデルを示すことを心がけ、達成できたときは解説することで誉めることを心がけるということを参考にして、活かしていきたいと思います。

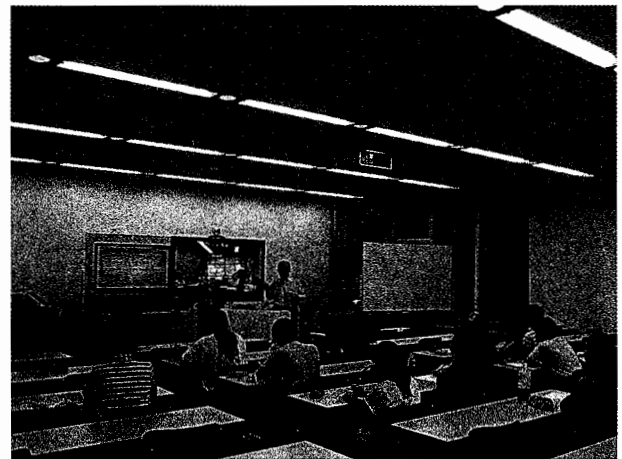
(神戸 / 声楽 / 1年)

- ・子どもと接するとき、何かを達成できたときに誉めるということが特に勉強になったので、今後に活かしたいです。

(神戸 / 声楽 / 1年)

- ・減点するよりも加点式に日本人がなれていないから、自らが発言する力を持つべきだと思います。

(神戸 / 声楽 / 4年)



※写真は東京音楽大学での様子です。



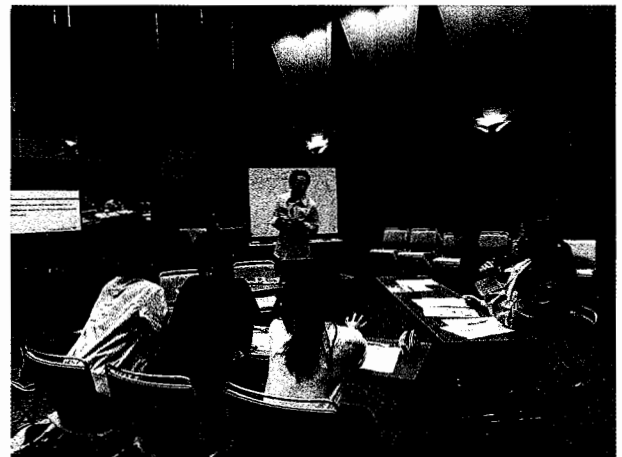
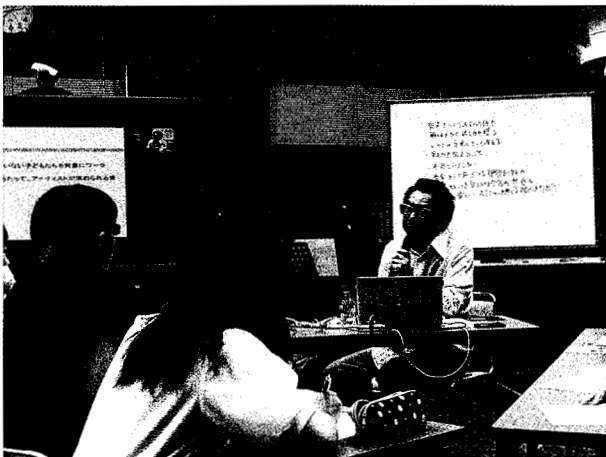
平成30年度 第6回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第6回ミュージック・コミュニケーション講座 「ワークショップの手法と意義」
講師	小島 剛（一般社団法人タッチオナ代表理事、大阪音楽大学特任准教授）
実施日時	2018年10月5日（金）14：00～15：30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>第6回の講座は、一般社団法人タッチオナ(Touch On Art)で子ども向けワークショップの企画やコーディネートを行っている小島剛氏を講師に迎えて、神戸女学院大学から発信した。</p> <p>様々なアートプロジェクトの中の一つである「学校向けプログラム」では、行政から事業を受託して行っている。ジャンルは音楽だけでなく美術や映画やメディアアートなど多岐にわたり、色々なアーティストとのコラボレーションを行っている。</p> <p>「地域向けプログラム」では、江之子島地域での子どもワークショップなど、教育に熱心なエリアを対象としている。このプログラムでは、わざと子どもにとって難しい内容を扱い、子どもにやる気を出させるのがポイントだと語った。</p> <p>次に、小島氏は「楽器を持っていない子どもたちに対して、アーティストに求められる資質とは何か？」と受講生に問い掛けた。受講生からは、その人自身が音楽を作りだすのが好きであること、音楽に関わったことがない子どもたちに興味をひく話し方ができること、子どもの気持ちを考える力など、たくさんの声が挙がった。</p> <p>その後、「庄内つくる音楽祭」のプロジェクトについて話された。この音楽祭は、音を使ったパフォーマンス・アートを通して、次世代の子どもたちの創造力を育むことを目的としている。また、音楽を生み出すプロセスでの子どもと大人の出会い、双方が教わり合うことなど、様々な発見を大切にしている。プロジェクトを展開する上で重要なキーワードとなる、社会的背景や子どもの様子が詳しく説明された。プロジェクトを行う地域の経済状態を知り、少子高齢化のために学校で鑑賞授業が組みにくくなった現状の中で、どのように企画を進めていくのかを考える必要性が述べられた。最終的には、子どもの学びになるだけではなく、社会包摂型アートとして町づくりや社会課題の解決を目指している。</p> <p>次に、タッチオナで行ったプロジェクトのチラシを受講生に配布し、どんな助成金を受けているのかの説明された。複数の目的があれば色々な助成金を受けることができ、地域団体、大学、家庭など様々なところと連携することで可能性が広がる。</p> <p>最後に、色々なワークショップの様子を、映像を交えて紹介された。ロックバンドや南アフリカのパーカッション奏者、美術家など、様々なジャンルのアーティストを招いて実施しているプログラムは、受講生にとってどれも驚きのあるものだったと思われる。楽器を自分で作るアフリカの文化を子どもたちにも体験させるワークショップでは、廃材を用いて打楽器やギターを作る。発言するのが苦手な学年には紙に書いてもらうなどの工夫をし、子どもの意見を積極的に採用することが大切だと話された。また、スタッフが作ったおやつを子どもたちと一緒に食べ、コミュニケーションをとることも大切にしている。</p> <p>受講生には、「今回の講座で学んだワークショップの様々なアイデアを、今後の</p>

〈学生のことば〉

は初めてで、一から作る様子が新鮮に感じました。

- ・今までやってきたワークショップの映像や写真を用いて教えてくださったので、楽しみながら参加することができました。最新のマイクを使ったワークショップが、日頃その物から出ているとは思えない音になっていて、とても興味深かったです。(神戸 / 声楽 / 1年)
- ・新しい変わった発想でワークショップが行われていたので、普通は音楽と一見結びつかないようなものでも、音楽にするにはどうすればよいかを想像するなどして、ワークショップを作りあげたいと思います。(神戸 / 声楽 / 1年)
- ・いろいろな芸術を小学生の頃から体験させるプログラムは非常に興味深いと思いました。子どもと大人の表現を同じフィールドで行い、評価を受けることで強い肯定感が生まれるという考え方も印象的でした。着眼点がとても新鮮でした。(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)
- ・地域に密着したワークショップ…地域の環境や状況に基づいて、そこに住む人たちはどんな人たちで、どんな工夫をすればよいのか、改めて考えさせられました。ワークショップと聞くと、対象のことだけを考えてしまうので、その対象がどんなもので、そのためにできる工夫はたくさんあると感じました。色々な視点から捉えて考えることができるようになりたいと改めて思いました。(東京 / 声楽 / 2年)
- ・多くの大人を巻きこみ、子どもたちに芸術体験を楽しんでもらうというのが素晴らしいと思いました。子どもがやりたいことを大人が手伝って実現させることが、自分から考えて満足感を得ることに繋がり、年齢や地域、立場などに合わせて内容を順応させていくことが大事だと思いました。(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)
- ・アーティストとコラボする、自分たちで好きなように組み合わせたり演奏したりするのを見ているだけで、とても楽しそうでした。時間をかけてワークショップを行って発表の場を作るというのも面白そうだと思います。今までのワークショップに加えて色々な工夫ができそうで、さらにワクワクしました。是非、これからもっと視野を広げて活かしていきたいです。(東京 / 声楽 / 2年)
- ・フェスティバルの映像の中で子どもたちが日常的に使う道具などを使って演奏していたが、とても興味深かった。一般的な楽器に全く劣らず、魅力的な楽器が沢山あった。1つのジャンルとして確立されているような気がした。(東京 / ピアノ / 3年)
- ・社会的背景からワークショップをデザインしていく。今までは地域についてよく知らないで活動していたので今後は意識したいです。(東京 / 声楽 / 4年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。



平成30年度 第7回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第7回ミュージック・コミュニケーション講座 「即興はこわくない！～カンタンなパターンですぐできる！即興が面白くなる秘訣」
講師	渚 智佳（ピアニスト）
実施日時	2018年10月19日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 A地下100教室
講座の概要	<p>渚先生は、幼少時よりヤマハ・ジュニアオリジナルコンサートで作曲にも積極的に取り組み、ピアノの演奏のみならず作曲や編曲の分野でも活躍されている。音大生がワークショップで創作の場面に接したとき、参加者が創作した音楽的断片にその場で和声付けをしたり、旋律を発展させたりする際に、即興することに戸惑いを感じずる機会が少なくないため、今回は、即興の秘訣について実例とともにお話しいただいた。</p> <p>まず、即興の初歩段階として、短いモチーフを反復することから始め、さらに模倣・発展・組み合わせにより展開できること、短いモチーフをつなげてフレーズに、さらにそれらを組み合わせる形式へと組み上げていく手順が紹介された。</p> <p>次にクラシック音楽の中に見られる即興の歴史を概観した。通常、音大生が接する作品は楽譜どおりに弾くことが基本であり、即興の余地はないように思われる。だからこそ、即興をどうしてよいかわからないという怖れがある。しかしバロック時代から現代にいたるまで、旋律の装飾や通奏低音の工夫、カデンツァの作曲や自由な装飾の挿入等、さまざまな即興が楽曲の中で行われていた実例が紹介された。さらに、ド・ミ・ソの3音を出発点としてどのような即興が可能か、先生が実演で示された。同じ3音から開始して、ハ長調の行進曲風や舞曲風から、付加音や変位和音を伴うラヴェル風、不協和音に満ちた現代曲等、さまざまな音楽が創り出された。このように自由に即興できるためには、多様な音楽様式や和声法をよく知り、さまざまな和音を弾き慣れ、自由に指を操るテクニックが必要である。</p> <p>次に、実際に即興の実習として、グループで出発点となる5音を選び、それを3段階に即興してみた。第1段階（前菜）では素材となる音の列をそのまま旋律として弾く。グループの中で、同じ音の連なりがさまざまなタイミングで奏されるので、その重なりに耳を傾ける。第2段階（スープ）では、あらかじめ準備しておいた第1のリズム形を当てはめる。第3段階（メインディッシュ）では、あらかじめ準備しておいた第2のリズム形を当てはめる。第1段階から第3段階まで進む際に、タイミングを合わせて合図を出すリーダーが必要となる。東京と神戸でそれぞれ即興を試み、お互いの音楽を聴きあった。</p> <p>何も無いところから秩序だった音楽を作らねばならない、という重圧に押しつぶされるのではなく、自由に小さな単位から音の重なりを楽しむ姿勢が強調された。また必ずしもすべてを独自に作らねばならないのではなく、場合によっては既知の旋律やリズムに頼るところがあってもよい。いずれにしても自分の引き出しを豊かにするために、多様な音楽や作品に接してそれを自分の持ち駒としていくような、音楽との積極的なかわり方の重要性が再認識される機会となった。</p>

〈学生のことば〉

・即興をするにあたりどのようなことが大切なのかを知ることができました。即興をどうやるかというよりも、実際にある曲を勉強し、引き出しを多くすることや、いろいろな音楽を知り、弾き、勉強することの大切さに気づき、またスケールや和音を知ることの大切さを認識しました。即興で弾くことは決まったことをやらなくてもよいので失敗をおそれずにやっていきたいと思いました。

(東京 / ピアノ / 1年)

・即興の歴史や知識などが学べてよかった。初めて会った人とアンサンブルができて楽しかった。

(東京 / ピアノ / 3年)

・セッションをするのが初めてだったのでとても楽しかった。

(東京 / ピアノ / 3年)

・即興と聞くと難しいイメージを持っていましたが、簡単な音からやってみると、自由で楽しいというイメージを持つことができました。しかし、やはり和声法を知ればよりよい演奏ができるので、和声の勉強をきちんとしようと思いました。

(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・ワークショップに参加した際、その場で弾き方を変えたり、調が変わったりする時に対応する大変さに気づいたので、その場で即興的に弾けるよう

になりたいと思いました。(曲のジャンル) 風でと言われた時に対応できなかったので、いろいろな曲を知ることの大切さに気づき、また、いろいろな曲を知ることが即興にもつながるとおっしゃっていたので、その点でもことの大切さを感じました。

(東京 / ピアノ / 1年)

・即興は演奏。すべてが正解。なおす必要がないということが安心できる要素でした。

(東京 / 声楽 / 院2年)

・今後セッションをする機会があったら、今回の授業内容を生かしていきたいです。

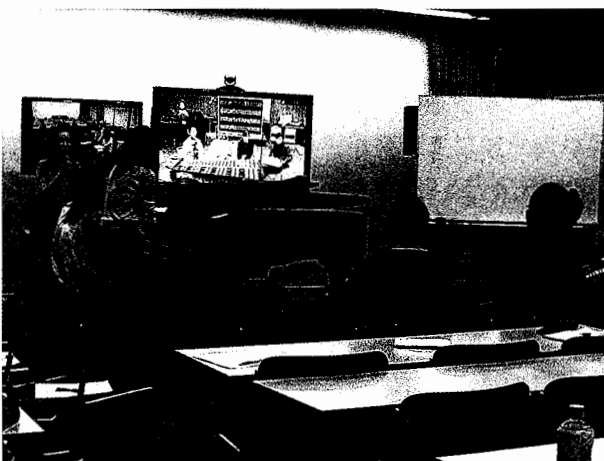
(東京 / ピアノ / 3年)

・即興演奏ができれば音楽でのコミュニケーションが広がるというのがとても楽しそうだったので、たくさんよい音楽を聴いて引き出しを増やし、即興演奏に恐れずチャレンジしたいと思います。

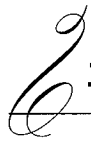
(東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年)

・作曲と即興はまた別物なのだと思いました。即興をできるようにするためには、もっと色々な曲や音楽に触れたり、和声法などをしっかり学ぶことが必要であると感じました。即興に失敗はないという気持ちで、どんどん挑戦することが大切だなと感じました。

(神戸 / 声楽 / 1年)



※写真は東京音楽大学での様子です。



平成30年度 第8回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第8回ミュージック・コミュニケーション講座 「シェイクスピアの作品を用いたインタラクティブ・コンサート」 ～音楽劇《ロミオとジュリエット》
講師	大類 朋美（ピアノ）、原田 佳菜子（フルート）、塚本 啓理（クラリネット）
実施日時	2018年11月16日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 A地下100教室
講座の概要	ティーチング・アーティスト養成カリキュラムの開発に取り組みおられる国立音楽大学の先生が、小学校等で展開されているインタラクティブ・コンサートの一例を、小学4年生を対象に実施するそのままの形で披露された。題材はプロコフィエフ作曲《ロミオとジュリエット》で、バレエ音楽としてオーケストラ用に作曲されているものを三重奏用に編曲し、ストーリーがわかりやすいように抜粋し、ナレーションや寸劇を挟んでの60分の演奏であった。登場人物を示すイラストボードの他に、演奏者は時に応じて衣装や小道具を用いて台詞を語り、また一場面では聴衆が合奏に参加するような工夫も織り込まれていた。

〈学生のことば〉

- ・話を進めながら音楽を入れることで、子どもでも長い間集中して聴くことができ、集中させる方法としてよい方法だと思いました。また、生徒自身が参加したり、先生が参加することで楽しく、またより集中して聴けるということに気づきました。（東京 / ピアノ / 1年）
- ・「シチュエーション」を作ることで、子どもたちにあきずにじっくり楽しんでもらえることが分かった。原曲のままだけでなく、カットや転調、編曲を行っていた。踊りや太鼓をいれて子どもたちが参加する場面を取り入れていた。（東京 / ヴァイオリン / 1年）
- ・とても楽しく音楽に触れることができ、また興味をもってもらえるように工夫されていてすばらし

いと思いました。また、音楽や物語の編集を自分で行われているのがすごかったです。

（東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年）

- ・実際に作曲を電子紙芝居として作り変えたのは、一般の人々にクラシックが浸透する画期的な方法だと思いました。また、ただ電子紙芝居をするだけでなく、見ている人もダンスなどで参加できるのは、より楽しんでクラシックに触れることができるなと思いました。（神戸 / 声楽 / 1年）
- ・今までの中で一番活用しやすいと思ったので、もしワークショップをすることがあれば、私は声楽専攻で演じることが好きなので、オペラを電子紙芝居にしたい。そうすれば、色々な人にクラシックを知ってもらえるようなワークショップができるかなと思いました。（神戸 / 声楽 / 1年）



※写真は東京音楽大学での様子です。

平成30年度 第9回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第9回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（神戸女学院大学）
発表者	神戸女学院大学 学生
実施日時	2018年11月30日（金）14:00～15:30
実施場所	神戸女学院大学音楽学部 合奏室
講座の概要	<p>2018年9月12日～15日に神戸女学院大学で実施した音楽作りワークショップ特別研修（30～33ページ参照）について、本学の履修生が発表を行った。</p> <p>ワークショップの概要を述べた後、各日のセッションについて、感想を交えながら報告した。ワークショップを初めて経験した受講生が多く、何もないところから音楽を作り出す難しさが強調された。また、最終日の「音で遊ぼう！子どものための音楽づくりワークショップ」で行う、「幸せなら手をたたこう」を使ったアイスブレイクの実演も行った。最終日については、一日の流れを説明した後、作品のテーマである「三太郎」の「桃太郎」「金太郎」「浦島太郎」それぞれのグループが、どのように子どもたちとコミュニケーションをとりながら音楽作りを行っていたのか、映像を用いて紹介した。</p> <p>発表後の質疑応答では、「作品発表ではどのような歌詞を使っていたのか？」「全員で演奏できる部分をあらかじめ作っていたのか？」など、最終日に子どもたちと作った作品についての質問が多数出た。</p> <p>学生にリーダーをする機会を多く与えてくれたワークショップだったが、初めて経験する学生にとっては困惑する面もあった。今後は、学生の経験値に合わせてながらワークショップの学びの場を作っていく必要性が述べられた。</p>

〈学生のこぼ〉

・今回は自分たちの発表でした。それぞれの役割を分担して当日まで準備しましたが、お互いの発表の繋ぎの部分がしっかり練習できていなかったのので、スムーズに発表できなかったのが心残りです。またこのような機会があれば、もっとスムーズに相手を引き込めるような発表をできるようにしたいです。
(神戸 / 声楽 / 1年)

・身近なこと、お話や童謡を使ってアレンジを試みることは意外とあまりないので、普段音楽に触れている私たちにも難しく感じることもあるというのは、随所に納得するところがありました。音楽経験のない子どもと一緒に曲を創るためのアプローチには様々な方法があって、一番子どもたちに取り組みやすいのは、創る作品のテーマのイメージを一緒によく考え、練ることかなと思いました。
(東京 / ピアノ / 4年)



※写真は神戸女学院大学での様子です。

平成30年度 第10回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第10回ミュージック・コミュニケーション講座 「インタラクティブ・コンサートの実践例～弦楽四重奏による参加型コンサート」
講師	久保田 慶一（国立音楽大学理事・副学長） 吉野 由香（フルート）、伊藤 みや乃（ヴァイオリン）、竹内 瑞紀（ヴィオラ）、 鈴木 佳都紗（チェロ）
実施日時	2018年12月7日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 A地下100教室
講座の概要	ティーチング・アーティスト養成カリキュラムの開発に取り組まれておられる研究グループのリーダーである国立音楽大学の久保田慶一先生が、ブース著『ティーチング・アーティスト』に基づき、ティーチング・アーティストの概念について説明し、インタラクティブ・コンサートで要となるエントリーポイントの実例を挙げられた。また実際に、国立音楽大学大学院の修了生たちが小学校等で展開しているインタラクティブ・コンサートの一例を実演により紹介した。このミニコンサートでは各楽器の紹介コーナーで各奏者がトークを受け持つ。さらに、四重奏の中で1パートが欠けたらどうなるのか、欠けたパートが耳で聴いてわかるのかどうか、など、アンサンブルに関するQ&Aが演奏（ベートーヴェン：セレナード Op.25/I、モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク KV525/I、チャイコフスキー：『くるみ割り人形』より「花のワルツ」）の合間に挟み込まれており、全体として聴衆との双方向的なやりとりを強く意識した構成となっていた。

〈学生のこぼ〉

- ・エントリーポイントを上手に設定し、合ったアクティビティをすることの大変さを知りました。どの曲を選ぶかで、行うことのできるアクティビティやエントリーポイントも限られると思うので、最初に考えることが一番大切なのではないかと思いました。（東京 / ピアノ / 1年）
- ・エントリーポイントの分類がとてもわかりやすいなと感じました。また、曲目指定や何か注文がある場合に、鑑賞会（コンサート）を行うのはとても大変そうだと感じました。進行がそれぞれの学校によって違うので、臨機応変に動かなくてはならないのも難しそうだと思います。クイズがたくさんあって工夫されていておもしろかったです。（東京 / ミュージック・リベラルアーツ / 1年）

- ・実際に中学生対象でやっていた演奏を、子どもたちの反応も教えていただきながら集中して聴いたので勉強になりました。初めて聞いた単語や話が多く、新しいことを吸収できて良かったです。（神戸 / 声楽 / 1年）
- ・ワークショップをする際には、エントリーポイントを何にするかをしっかりと考えて、相手に伝わるような内容のワークショップにしたいです。（神戸 / 声楽 / 1年）



※写真は東京音楽大学での様子です。



平成30年度 第11・12回「ミュージック・コミュニケーション講座」

講座の名称	第11回ミュージック・コミュニケーション講座 実習報告会（東京音楽大学）
発表者	東京音楽大学 学生
実施日時	2018年12月14日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 A地下100教室
講座の概要	東京音楽大学で実施したワークショップ（6月大宮、7月南池袋）と特別セミナー（9月）について、学生がその実施概要を発表した。各事業の内容については22～23、25～27ページを参照。

〈学生のことば〉

・実際に自分が参加できなかったワークショップの様子がわかり、とてもおもしろかったです。普段同じ教室で勉強している仲間が発表している姿を見て、非常に励みになりました。自分の発表ではとても緊張しましたが、みんなが楽しそうな表情で聞いてくれてとても心強かったです。もっとわかりやすく、楽しいプレゼンができるようになりたいと思いました。是非またチャレンジしたいの

で、これからも勉強していきたいです。

（東京 / 声楽 / 2年）

・こちらをひきつけるような話し方での発表だったので、退屈せず楽しんで最後までプレゼンテーションを聞くことができました。同じ講師の指導を受けても、全く違うワークショップができることに驚きました。

（神戸 / 声楽 / 1年）

講座の名称	第12回ミュージック・コミュニケーション講座 ワークショップの実践報告および総括
講師	東京音楽大学 学生（実践報告）、津上智実・武石みどり（総括）
実施日時	2019年1月18日（金）14：10～15：30
実施場所	東京音楽大学 A地下100教室
講座の概要	前半は、東京音楽大学で実施したワークショップ（8月駒ヶ根、10月久喜）について学生が実施概要を発表した。各事業の内容については24、28ページを参照。後半は1年間の総括として、2大学間でディスカッションを行った。特に、一般的な音楽・楽器指導においては能力主義に陥る傾向が強い中で、本講座を受講した学生が、どのような場面においても「音楽の本来の楽しさ」「人が自然に具えている音楽性」に目を向け、人と向き合う音楽の場を創生していくことへの期待が語られた。

〈学生のことば〉

・「一部の音楽ができる人がいればいい」「それ以外の人が取り残されてしまう」今の日本ならではの風潮だなと感じました。でもインタラクティブ・コンサートだからこそ、そこを変えていけると思うので、もっともっと研究して盛り上げていきたいなと思っています。是非これからのワークショップに活かしていきたいと感じました。

（東京 / 声楽 / 4年）

・今まで知らなかった新しい分野に触れることができ、視野を広げることができたのでよかったです。ワークショップでは初めてで慣れないことが多く、どうすれば子どもたちからアイデアを引き出せるか、どうすれば活動に対しての子どもたちのモチベーションを上げられるかを考え、接するのが難しくはありましたが楽しかったです。

（神戸 / 声楽 / 1年）



音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」@大宮

平成 30 年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」
実施日時	2018年6月23日(土) 9:15~11:30
実施場所	埼玉県大宮市立大宮東小学校
主催	大宮東小学校 土曜チャレンジスクール (PTA 組織)
対象	小学3年生 19名、4年生 9名、5年生 9名、6年生 11名 合計 48名 保護者(見学) 10名

〈事業概要〉

大宮東小学校の土曜チャレンジスクールという放課後活動 (PTA 主催) の一環として、3年生以上の児童を対象にワークショップを実施した。計画当初には参加者が60名以上と聞いていたため、ミュージック・コミュニケーション講座の受講生4名と卒業生3名、教員1名の計8名でうかがい、音楽創作を行った。今回のテーマは「私のお気に入り」と設定した。

■導入

- ・身体ほぐし
- ・リズムのコール&レスポンス
- ・テーマとなる歌の練習 (輪唱)

■楽器に触れる

- ・様々な楽器の音を鳴らしてみ、お気に入りの楽器を選ぶ
- ・合図に合わせていくつかの鳴らし方で楽器を演奏したり、演奏を止めたりすることを練習する

■音楽創作

テーマ

「お気に入りの楽器でお気に入りの音楽を作ろう」

さまざまな楽器を試したのち自分の楽器を決めたところで、「打楽器・すず・リコーダー・鍵盤のある楽器・歌」の5グループができあがった。チームに分かれて自由に音楽づくりをして持ち寄ったところ、既存の楽曲のモチーフを使っているグループや身体の動きを演奏に組み入れているグループなどが見られた。他のグループに刺激を受けて再度グループで手を加え、5グループをどのような順番で演奏するかを決めて、最後にひとつの作品として仕上げた。

〈参加者のことば〉

- ・1人やんちゃな子がいました。とても豊かな感性を持っていて、今後爆発的に才能を開花するかもしれませんが、そのためには周りの大人の理解が必要だと感じました。カノンのメロディに乗せてオリジナルの歌詞を作り、素敵な歌ができました。
(東京 / 声楽 / 4年)
- ・子どもたちの話を聞く姿勢がしっかりしていて、苦勞せずに取り組むことができました。ただ時間が限られていたので、リーダーが方向性を決めてしまった部分があります。もう少し「自分で考えて音を鳴らしてみる」時間を作ってあげ、子ども同士がディスカッションする時間をとってあげられると、もっといい時間になるのかなと思います。
(東京 / 卒業生)
- ・2時間も間がもつのかと心配していましたが、子どもたちが夢中になっていて、あっという間に時間が過ぎました。いろいろな音楽ができあがり、指導力に感心しました。
(PTA 関係者)



ワークショップの様子

音楽ワークショップ 第9回みないけキッズアーティスト「はじけるリズム♪」

平成 30 年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	第9回みないけキッズアーティスト「はじけるリズム♪」
実施日時	2018年7月31日(火) 13:30～15:00
実施場所	区民ひろば南池袋
共催	東京音楽大学 連携センター、区民ひろば南池袋
対象	豊島区在住・在学の小学生(参加者数20名)

〈事業概要〉

夏休み中の小学生を対象に、ワークショップを創作・実践した。今回は、4月からミュージック・コミュニケーション講座を履修している学生を中心に、5名の学生が初めてリーディングをする機会となった。ボディー・パーカッションやカップ遊びなど、リズムと一体感が感じられるプログラムをめざした。

■導入アイスブレイク

- ・リーダーの真似をする
 - ・リーダーの後に続いて真似をするコール&レスポンスなどを行った。様々な動きをしながら、チーム全体の空気感や、参加者にどんなキャラクターを持っている人がいるか、様子を観察した。
 - ・拍手回し(ヴァリエーション)
- シンプルに隣の人に拍手を送り円を一周させる遊びに変化を加え、子どもたちのアイデアを募って、足踏みを回すなど多様な動作へと発展させた。

■カップ遊び

日用品を使って音楽を創る例として、プラスチックカップを様々な角度でたたいたり、リズムを刻んだりしてアンサンブルにした。これは、のちの音楽創作のアイデアを引き出すための伏線の役目もしている。

■創作活動

アイスブレイクやカップ遊びのワークの後に、ボディー・パーカッションとカップ遊びとのグループに分かれ、少人数での音楽創作に取り組んだ。初めてグループワークをリードする学生は、どんな質問を投げかけたらいいか戸惑いながらも、参加者の意見を平等に取り入れることを意識しながら創作に取り組んだ。

■発表

あらかじめ用意したピアノのテーマ曲を中心に、子どもたちの創作した音楽の発表順を考え、全体発表を行った。発表中に待機している子どもたちが手持ち無沙汰にならないように、歌でほかのチームを支える役割を与え、各チームの作品の構成を楽しみながら発表することができた。

ボディー・パーカッションに比べて、カップのリズムの音量が大きく、音量バランスを調整するための指示を明確に出すことに苦労した。授業の机上でワークショップを知った学生たちは、初めて自分でプログラムの構成を考え実践してみたのであるが、現場では想定外のことが起こり、臨機応変な対応するためのスキルも必要であることを実感する機会ともなった。



ワークショップの様子



音楽ワークショップ@エル・システマ ジャパン 駒ヶ根 夏季学習会

平成 30 年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	エル・システマ ジャパン 駒ヶ根 夏季学習会 ワークショップ
実施日時	2018 年 8 月 18 日 (土) 13:30 ~ 16:30
実施場所	長野県駒ヶ根市文化会館
共催	エル・システマ ジャパン
対象	エル・システマ駒ヶ根で弦楽器を習う子どもたち 約 60 名

〈事業概要〉

2016 年に相馬でワークショップをさせていただいて以来、2 年ぶりでエル・システマ ジャパンとの連携ワークショップを実践した。エル・システマ ジャパン駒ヶ根は非被災地に設置された初めてのエル・システマ拠点であり、創設されてからまだ日が浅く、被災地とは異なり、駒ヶ根市の教育委員会や小学校と連携して、いわば学童保育や部活動のような役割を担っている。

今回は、ミュージック・コミュニケーション講座の履修生 3 名と卒業生 2 名、スタッフ 2 名の総勢 7 名で実施した。

■アイスブレイク

全員でリーダーの真似をすることからはじまり、リズムのコール&レスポンスや、全員で手拍子をつなぐワークを行った。大人数ならではの一体感のある時間となった。

■カノンと歌詞創作

あらかじめ用意したカノンの旋律に、駒ヶ根の名産はなにか？と子どもたちに問いかけ、「スキー・ソースかつ丼・駒ヶ根」の 3 つの言葉を歌詞にして歌った。

■ボディーパーカッション

駒ヶ根市は河童伝説で有名であることから、谷川俊太郎の詩集『ことばあそびうた』の中から「かっぱ」という詩を題材に選び、言葉にリズムを当てはめてボディー・パーカッションを全員で行った。

■音楽創作

・ヴァイオリンチーム (序曲を創作)

エル・システマ ジャパン駒ヶ根が創設されてからまだ日が浅いため、楽器の習熟度にばらつきがあり、全員でできることを探すのに時間がかかった。結果的に、弓を使うよりピツィカートの方が全員で演奏しやすいということで、ピツィカートを使った曲が完成した。

・歌チーム

台詞や動きなどを伴った歌づくりに取り組み、リーダーを中心に想像力豊かなグループワークを展開した。

■発表

- ①ヴァイオリンチームが創作した序曲
 - ②各グループの発表
 - ③河童のボディー・パーカッション
- の 3 つを組み合わせるとひとつの作品に組み上げた。



ワークショップの様子

東京音楽大学 音楽ワークショップ特別セミナー ならびに おんがくづくりワークショップ 「イギリスのせんせいたちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう」

平成 30 年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	音楽ワークショップ特別セミナー ならびに おんがくづくりワークショップ 「イギリスのせんせいたちといっしょに、みんなのおんがくをつくろう」
講師	ジェームズ・アダムス、オリヴィア・ブラッドベリー (英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生)
実施日時・期間	2018年9月7日(金)～10日(月)
実施場所	東京音楽大学 A 地下 100 教室
参加費	東京音楽大学生、ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生は無料 一般参加者(上記以外) 5000 円/9 日のワークショップ参加は無料
主催・協力など	主催：東京音楽大学 協力：英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、神戸女学院大学
参加者数	東京音楽大学生：6 名 一般参加者：8 名 9 日のワークショップ参加者：子ども 17 名、保護者 17 名

〈事業概要〉

昨年に引き続きジェームズ・アダムス氏とオリヴィア・ブラッドベリー氏を講師に迎え、4日間に渡って講座を行い、3日目には実践として子どもたちを招いて音楽ワークショップを行った。彼らがイギリスで実践している多様なワークショップのアイデアを教わり、小さな素材から音楽を展開していく手法と柔軟な考え方を学ぶ刺激的な機会となった。

1 日目前半：導入

ワークショップリーダーの真似をするアイスブレイクから始まり、心と身体をほぐすワークや、その場で出会った人の名前を覚えるためのワークを行った。3連のフレーズで構成される歌のワークでは、シンプルな素材から、あらゆる音楽的な要素を組み合わせ豊かなアンサンブルが展開された。

ワークショップリーダーが一方向的に音楽を提案するのではなく、必ず参加者のアイデアを取り入れる場面を設け、一見かみ合わないようなアイデアが出て、何らかの接点を見つけ、徐々に一つの音楽にまとまっていく過程がとても興味深かった。音楽的能力の優劣を判断基準とするのではなく、誰もが居心地のよい空間を創ることに重

点が置かれる学びに、参加者が自然に惹きつけられていくのが感じられた。

1 日目後半：身近な素材による音楽づくり

ワークショップで音楽づくりをする際の素材は頭で考案するばかりでなく、身の周りから拾い出すことも可能である。その例として講師から、校内を回って身の周りの音を録音するという課題が出された。

人の会話、食べ物の咀嚼音など面白い音素材をシェアし、数人のグループで素材を選び、短い単位を繰り返すなどしてフレーズを創り出し、そこに音楽的な解釈を加えて一つの音楽にすることを試みた。「こんな音が」と思えるような素材であっても、ある程度加工して、音楽的素材に見立てることができることを実体験した。話し声を基に歌を創作したり、言葉をリズムに置き換えてみたり、音に和声を加えてみたり、間を創ってみたりと、様々な試みの末、各グループの作品発表を行った。

2 日目前半：1 日目の振り返り

前日のワークに対する質疑応答から始まった。たとえば、以下のような質問があった。

Q：素材を拾ってきて創作する目的は？

A：参加者の創造性を生かした作品創りを体験してもらいたいのので、あえて既存の楽曲を使うのではなく、オリジナルの素材を使うことが多い。既存の楽曲を使う場合もあるが、そのまま使うのではなく、一部分を引用したり、アレンジして使うことが多い。

Q：ファシリテーションの方法について

A：グループ内で創作をするためには、短い時間で素材の取捨選択をする決断力が大切である。参加者の様子をよく観察して、素材が難しすぎないか、単純化すべきかどうかを判断する。参加者が楽しんでいるかどうかも大切だが、リーダー自身も音楽を楽しんでいるかどうか、自分の音楽的価値観に反していないかどうかも大切だ。ワークショップリーダーとしては、音楽を一つのキャンパスのように捉え、一枚の絵を完成させるように足りないものを補っていく感覚がある。例えば、背景としてベースラインを繰り返して全体を支える。前景として参加者の音に合いの手や和声を加えるなど、そのグループに足りないもの、音楽的にプラスしたら素敵になる音をバランスよく加えていくことが大切である。

2日目後半：ラーガによる音楽づくり

後半は、異国情緒あふれるインドのラーガを用いた曲づくりのアイデアを学んだ。インドのスタイルにならい、床で車座を組みあぐらをかいたスタイルで、リラックスさせた状態で声を出す取り組みで、子どもよりも大人や高齢者を対象とするのがふさわしいと思われる。シュルティボックス（ハルモニウム）と呼ばれるドローン楽器の和音に支えられながら、参加者それぞれが声の響きの身体感覚を確かめたり、互いに異なる響きの個性を聴きあったりした。

ラーガ音階の仕組みを学んだのち、次に自分たちで5音の音階を創作し、それを基に旋律を作っ

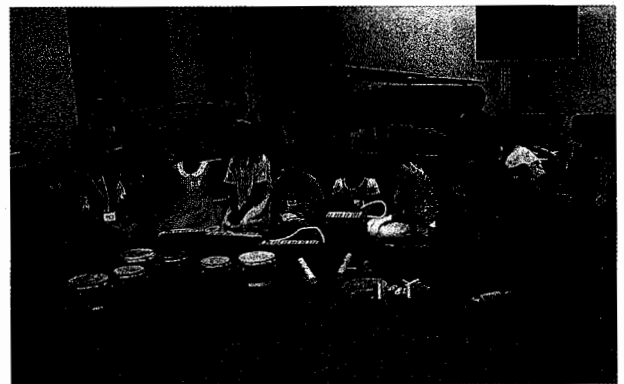
た。上行と下行で変化する音階を用い、各グループで独自の旋律を組み合わせた小品を創作した上で、さらに異なるラーガを用いているグループと組み合わせ、不可思議な響きの音楽へと組み上げた。

これらの創作は、既存の旋律や和声法に束縛されることなく、多様な音使いや（不協和音を含む）響きに美しさや面白さを見出す訓練でもあり、調性の音楽に慣れている音大生にとってはチャレンジングな時間であった。

3日目：小学生対象のワークショップ実践

参加者の話し合いにより、今回のワークショップでは楽器を擬人化し、そのキャラクターを音で表現してみることをテーマとすることに決まった。

アイスブレイクでは身体を動かすワーク、リズムを真似るワーク、声を出すワークに複数の楽器を試すコーナーを組み入れた。リーダーが楽器を人物に見立てて（たとえばコントラバス＝ダンディなアメリカ人男性ジョージ、等）その性格を表す音楽的フレーズをモデル演奏した後、三つのグループ（鍵盤楽器、小物打楽器、ドラム）に分かれてそれぞれの性格を話し合い、どのように音で表現するかを考えた。各グループの中間発表の結果、三つのグループをつなげて男の子・女の子・サルが冒険旅行をするストーリーにまとめ、保護者の助演も交えて最終発表を行った。



4日目：振り返り

前日の反省を基に、今後の課題として挙げた以下の2項目について実習した。

①旋律を創る→グルーヴを創る

短いフレーズを作って、つなげていく。断片の場合は反復・変形などを加えてフレーズ化する。それに見合うベースラインを見つけて、和声をつける。

②調性の縛りから離れる

機能和声の安定感を求め、不協和音を避けようとするのではなく、無調をも含む柔軟な展開を考える。既存曲の先入感を捨てて全く新しい和声づけを試みる。「さんぽ」を用いて実習)



最後に創作のアドバイスとして、自分で一分の間もないように音楽を創り上げてしまうのではなく、参加者が音楽的に参加できるようなスペースを空け、お互いの音をよく聴きながら創り上げていくことの重要性が強調された。人の音を聴くことは演奏の学生にとってはアンサンブルの本質に関わる重要な資質である。音楽づくりをしながら空間を支配するのではなく、音楽を共有する感覚をもってほしいという有益な示唆が体感されたセミナーであった。

〈参加者のことば〉

- ・自分の思いを伝えたり、リーディングしたり、少しずつですが、挑戦できるようになりました。皆様のおかげで、触れる機会の無い楽器にチャレンジできました。(一般参加者)
- ・いろんな音階の使用や音楽の既存の法則にとらわれない自由な作曲の発想、シンプルな素材の大切さ等を発見しました。(一般参加者)

- ・英語の理解をもっとできるようにしたいと思った。だんだん自分が出せるようになった。(一般参加者)

- ・1日だけの参加でしたが、インド音階のおもしろさを感じることができました。(一般参加者)

- ・リーディングの経験がほとんどなく、どうしてよいか分からないため、進んでやってみようと思うことがなかったのですが、今回の講座を受けてみて、やってみようと思いました。今回のワークショップの中で少しやらせてもらいましたが、ただ順番を示すだけでも、私にとっては難しいことだったので、今後リーディングの方法など学んでみたいと思いました。(東京/ピアノ/1年)

- ・グループ内でのリーダーの連携が自分の課題だと実感した。さぐりあいの大切さ、相手の音を聞く大切さを学びました。アレンジをもっとぱっとできるようになりたいです。(一般参加者)

- ・今まで、単純なフレーズを考えることしかできなかったのが、決まっている和音にしばられなくなった。(東京/弦楽器/4年)

- ・楽器にキャラクターを取り入れるというのが、新鮮でもっと想像力をはたかせようと思った。生活の中の音にも発見があり、音楽があると思いました。(東京/声楽/修士2年)



ワークショップの様子

音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」@久喜

平成 30 年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	音楽ワークショップ「今日から君もミュージシャン」
実施日時	2018年10月20日(土) ①9:05～11:00 ②13:00～15:30
実施場所	①埼玉県久喜市立三箇小学校 ②埼玉県久喜市立菖蒲東小学校
協力	ゆうゆうプラザ(各小学校のPTA組織)
対象	①埼玉県久喜市立三箇小学生と保護者 計28名 ②埼玉県久喜市立菖蒲東小学生と保護者 計12名

〈事業概要〉

久喜市立の三箇小学校と菖蒲東小学校の小学生を対象に、休日の土曜日にワークショップを実施した。各小学校に「ゆうゆうプラザ」というPTA組織があり、学校と協力して放課後や土曜日のプログラムを運営している。今回はそのプログラムの一環として、ミュージック・コミュニケーション講座の受講生4名とスタッフ2名の計6名でうかがい、音楽創作を行った(2校とも同様の内容)。

■導入

- ・身体ほぐし
- ・リズムのコール&レスポンス
- ・テーマとなる歌の練習(輪唱)

■楽器に触れる

- ・様々な楽器の音を鳴らしてみる
- ・合図に合わせて楽器を鳴らす

■音楽創作

テーマ

「楽器の音からそれぞれのキャラクターを考え、楽器たちの物語を作ろう」

学生によるデモンストレーションで、フルートをキャラクターにした音楽を演奏。その後子どもたちに好きな楽器を選んでもらい、楽器の種類別に3グループ(金物、鍵盤、打楽器)に分かれて音楽創作を行った。

各チームの音楽作品が出来上がった後、演奏する順番を考え、また各チームが創作したリズムや要素を組み合わせる新たな音楽を生み出し、1曲の音楽作品にまとめた。

2校とも同じテーマで同様のプロセスによる創

作活動を行った。三箇小学校は「王子とお姫様の結婚式」とメルヘン調に、最後は皆で結婚を祝う歌を歌って締めくくったのに対して、菖蒲東小学校では「宇宙から来た生物と森の音楽会」と題し、現代的で環境音楽のような作品ができあがった。

〈参加者のことば〉

- ・2校でまったく違った作品ができあがったのがおもしろかった。菖蒲東小では、金物の音の広がりから「宇宙」をイメージしました。打楽器は「歩く」動作から散歩している様子を表現しました。最初は混沌とした音楽から始まり、次は賑やかな楽しい音楽へとつながりました。

(東京 / 声楽 / 修士2年)

- ・大人の方が、楽器に触って演奏したり、歌ったり、子どもと一緒にアイデアを考えたり、楽しそうにしていたのが印象的でした。子どもも大人も、楽器のセッションを通してコミュニケーションを取ることが新鮮でした。

(PTA関係者)



ワークショップの様子

第4回インタラクティブ・コンサート「音が伝える物語」

平成30年度 実習報告 (東京音楽大学)

事業名称	第4回インタラクティブ・コンサート「音が伝える物語」
実施日時	2019年2月21日(木) 14:00～15:00
実施場所	区民ひろば南池袋
共催	NPO法人みみずくの杜(区民ひろば南池袋) 東京音楽大学連携センター
対象	シニアの方を中心にどなたでも参加可能(参加者シニアの方15名、親子3組) 参加学生:学部生6名 院生1名

〈事業概要〉

東京音楽大学に隣接する区民ひろば南池袋では、子どもを対象としたイベントのほか、シニアの方を対象とした様々なジャンルのサークルがあり、元気なシニア層が日常的に施設に足を運んできている。

その方々を対象に、4回ほどの練習を経て参加性の強いコンサートを実施した。参加した学生は年間を通して、インタラクティブ・コンサートとワークショップの両方を学んでいたため、参加の仕組みのアイデア、参加を促すリーディングの両面に成長がみられた。

〈プログラム〉

■ドヴォルザーク / ユーモレスク

(列車の音を表現するボディーパーカッション)

■プッチーニ / 《ジャンニ・スキッキ》より

「わたしのおとうさん」

(願いごとの度合いと音高を表現するワーク)

■中田喜直 / むこうむこう

(抽象的な歌詞にイメージ付けをするワーク)

■モーツァルト / きらきら星変奏曲

(音楽のキャラクターに合わせてストーリーを創作するワーク)

■中田章 / 早春賦 全員合唱

上記のカッコ内は、楽曲の演奏の前に、聴衆の積極的参加を促すために行った導入ワークの内容である。

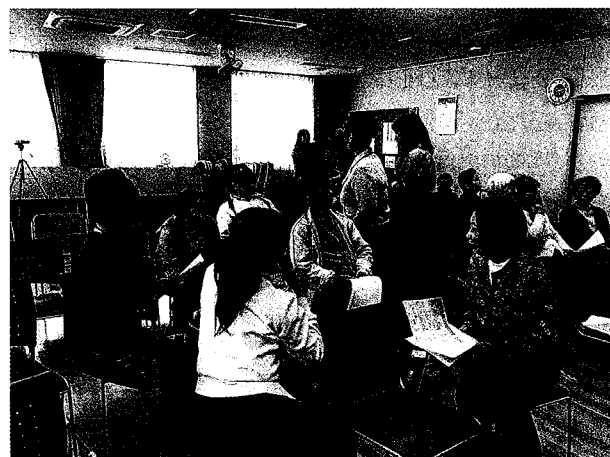
◎プッチーニ / 「わたしのおとうさん」

この楽曲では音高が気持ちの高ぶりを表現している点をエントリーポイント(楽曲理解の入り口)とした。日常的な欲求から命の危機迫る懇願に至るまで、状況にかなった「おねがい!」の声を参加者に発してもらうことで、欲求の高まりが音の高さに反映されることを体感してもらったのちに演奏をした。段階的に表現が変化していく過程を、

聴衆をうまく巻き込みながら導くことができた。

◎モーツァルト / 「きらきら星変奏曲」

変奏曲で主題がさまざまに性格と形を変えて表現される点をエントリーポイントとして、抜粋した4つの変奏を聴いてもらい、グループでイメージに沿ったストーリーを創作した。聴衆から出たアイデアを発表してもらった直後に演奏すると笑いが起き、そのイメージに近い演奏ができる。双方向に影響し合いながら演奏する様子が印象的であった。演奏者も聴衆の中に入って話し合う機会は、通常の演奏会ではなかなか無い。積極的な聴衆に恵まれて、学生たちが双方向性を学ぶよい機会となった。



ワークショップの様子

「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第9回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」

平成30年度 実習報告（神戸女学院大学）

事業名称	「音楽作りワークショップ特別研修」ならびに 第9回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」
音楽作り指導者	オリヴィア・ブラッドベリー、ジェームズ・アダムス、東 瑛子 (英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校のリーダーシップ修士課程修了生)
企画・司会	津上 智実（神戸女学院大学音楽学部教授）
実施日時・期間	2018年9月12日（水）10：00～12：00 9月13日（木）10：00～15：00 9月14日（金）10：00～15：00 9月15日（土）8：45～16：00 ※「子どものための音楽作りワークショップ」は最終日のみ
実施場所	神戸女学院大学音楽館ホール
参加費	神戸女学院生、ミュージック・コミュニケーション講座受講生・既習生（卒業生含む） は無料 一般の参加者（上記以外）：5,000円（全日参加） 15日子ども参加：無料
主催・協力など	主催：神戸女学院大学音楽学部 協力：英国ロンドン市立ギルドホール音楽演劇学校、東京音楽大学
参加者数	9月12、13、14日 神戸女学院生10名（1年生2名、2年生2名、4年生5名、院生1名） 卒業生2名 9月15日 神戸女学院生10名（1年生2名、2年生2名、4年生5名、院生1名） 卒業生1名 子ども11名（小1年生2名、小2年生4名、小3年生4名、小5年生1名） *（ ）は男の子 教員・スタッフ5名、逐次通訳2名（院生2名）

〈事業概要〉

本事業の目的は、音楽を通し、誰もが持っているクリエイティブなアイデアや能力を引き出し、またコミュニケーション能力やリーダーシップなど、これから社会に飛び立つ学生にとって必要な力を実践的に身につけることである。

そのため、2018年9月12日からの4日間、英国ギルドホール音楽院リーダーシップ・コースの修了生であり、世界で活躍する歌手、作曲家、シアター・メイカーのオリヴィア・ブラッドベリーとマルチ・プレイヤー、作曲家のジェームズ・アダムスを日本に招聘し、また同修了生で本学卒

業生の東瑛子（ヴァイオリン）を講師として迎え、本学音楽学部生を対象とする音楽作りワークショップ（Creative Music Workshop）特別研修を実施した。9月12日、13日、14日の3日間は学生対象の研修を計5コマ、最終日の9月15日には学生の学びの仕上げとして、子どもたちを交えた形で、第9回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」を実施した（後者は、本学アウトリーチ・センターが定期開催している「子どものためのコンサート・シリーズ」の関連事業として実施）。

1日目の前半は、自己紹介をした後、アイスブレ

イクとして円になって声を出しながら体をほぐした。その後、手や足でリズムをとりながら、オリヴィアが歌うフレーズを繰り返し歌った。音量・テンポ・リズムの指示はすべて講師のジェスチャーで行われ、ワークショップを初めて体験した学生は、戸惑う様子もあったが、次第にまわりの動きに合わせて、リズムをとれるようになっていった。



後半は2～3人のグループになり、それぞれが大学内で聴こえてくる音を探し、虫の音・噴水・消毒液ポンプ・足音・話し声・黒電話などを携帯電話に録音して発表した。次に3つのグループが、自分たちの録音した音から連想する音楽を、マリimbaやピアノ、ヴァイオリン、鈴やギロなどの楽器を使って短い曲を作り、声楽の学生はその曲に合わせて歌を歌った。さらにグループ同士が、お互いのモチーフを少し変化させ、それぞれの楽器と合わせてセッションし、最初に自分たちが作った曲とは違った曲が生まれた。この様に、一人一人のアイデアで作ったメロディーが、リズムや音量を変えることにより、全く違う音楽に変化し、また他者と共有することによって、別の作品になるのだということを体感した。



2日目は、このワークショップをしていく上で、アーティストとして何が大切か、お互いにディスカッションすることから入った。その後、前日の

宿題の発表として「七つの子」のメロディーを用い、それぞれ学生が専攻しているヴァイオリンやオーボエ、カホン、ピアノ、歌で考えてきた曲を発表し、リーディングの方法を学んだ。次に、オリヴィアの奏でるシュルティボックスのゆったりした調べに合わせて、インドの古典音楽「ラーガ」を一緒に歌った。そのあと、学年の違う3人一組のグループに分かれて、自分たちで作ったオリジナル・ラーガを皆の前で発表した。ワークショップを初めて体験し、緊張していた学生もだんだん慣れてきて、不思議な雰囲気のある曲を作ってきた。



講師の先生方からも「すばらしい！」と歓声が上がリ、オリヴィアがシュルティボックスでセッションしたことが、学生の自信にもつながったようだ。次に、この3つの曲の印象的なフレーズやメロディーを使い、メンバーを替えてまた違った曲を作った。雰囲気は残しつつ、リズムを変え、ナレーションをいれるなど工夫した。この様に一つのフレーズから、他者のイメージや意見を取り入れることによって、全く違う曲が出来上がるという新たな体験を通して、自分の可能性を再発見していった。その後、アーティストとして、子どもたちとどの様な曲作りをするか、皆でディスカッションした。そして、曲を繋いで一つの曲にし、学生がリーダーとなり、指示を出して指揮をする練習をした。曲作りとは違い、ジェスチャーだけで指揮をすることの難しさを実感していた。15日に向けて、子どもたちに分かりやすく伝えるには、どうしたらいいかを考えてくる、という課題が出された。

3日目はまずアイスブレイクとして、東瑛子氏からガーナのウィンデレー（平和）を教わり、一緒に歌って踊りながら、エネルギーを発散させた。午前中は全員で円になり、1人がリーダーになって指示を出しながら、曲を作る練習をした。中には

難しく考えてしまい、それが表情に出てしまう学生や、演奏をストップできなくなり、長くなってしまふ学生がいた。子どもたちに伝える方法として、講師の先生方から拍子をカウントして合図を出す方法や、演奏を止める時は、体や目を使って伝えることなどがアドバイスされた。

午後はいよいよ、15日に向けてテーマを考えた。テーマを決めると、曲を作りやすくなる利点がある。子どもたちに馴染みのあるアニメや民話などのアイデアが出て、テーマは3 TARO'S (桃太郎、金太郎、浦島太郎) に決まった。



アイスブレイクは「幸せなら手をたたこう」を使って手遊びをすることになった。パーカッションの学生はリズムを担当し、声楽の学生は子どもたちの声をあたため、その他の学生は、子どもたちが集中できるよう、側に付き添うことにした。アイスブレイクをすることで、グループのチームワークを育て、子どもたちの様子から一人一人の性格を知るための、よいチャンスになると教わった。

3つのグループにわかれて、それぞれのTAROのテーマ曲を考えて発表した。発表のあと、明日のアイスブレイクを担当する順番、時間などの打ち合わせをした。

最終日の9月15日は、小学校1年生から5年生までの子ども11名を迎えて、第9回「音で遊ぼう！子どものための音楽作りワークショップ」が開催された。子どもたちは、本学で用意した小物楽器や、持参したリコーダー、ヴァイオリンを持ち、音楽作りに参加した。初めての参加で、家族と離れて不安を感じている子どもがいたので、みんなで紙風船を使って遊び、そのあと受講生が準備してきた「幸せなら手をたたこう」を歌いながら、アイスブレイクを始めた。

アイスブレイクの後は、まず始めに学生たちが



作った3 TARO'Sの音楽を子どもたちに聴いてもらい、それぞれやってみたいTAROのグループに入ってもらった。グループごとに、物語からイメージをふくらませて音作りをしたあと、全員が集まり、グループで考えた音楽をひとつの曲にした。楽譜も何もないところに、子どもたちが想像した音が変わり、いっそう賑やかな音楽が出来上がっていった。



ワークショップの締めくくりとして、保護者が観客席で見守る中、作品発表が行われた。家族が見ている前で演奏したので、リハーサルの時よりもやや緊張している子どももいたが、それぞれ練習の成果を思う存分発揮して、最後は大きな拍手をもらって、ほっとした表情になった。

最後に、今日のワークショップについて、受講生と子どもたちでディスカッションを行った。3つのグループに分かれ、楽しかったことや反省点を絵や文にして、思い出しながら発表した。

子どもたちが帰った後、受講生と講師陣は、最終日と研修会全体についての反省会を行い、一人ずつ感想を発表した。

なお、本学大学院通訳コースの院生2名が、逐次通訳を行い、講師と学生の相互理解を助けてくれたことを記して感謝する。



〈参加者のことば〉

・ 講座の初日にいきなりアドリブで歌ったり、曲を作ったりしたのはとても難しかったですが、初めての体験だったので楽しかったです。それぞれが作った音楽を組み合わせて、新しい音楽を作るのは先生方の指示があったからこそ、できたと思いました。子どもたちのワークショップ当日は、固定観念や型にとらわれている私たちにとって、子どもたちの発想は未知で、とても刺激的で参考になりました。
(声楽 / 1年)

・ 初回の授業で突然ウォーミングアップの後に、1人ずつアドリブで、メロディーを考えることを求められて戸惑いましたが、先生方や先輩方を参考にしたので、なんとか乗り切れました。2日目からグループに分かれて、テーマを決めて一からの音楽作りをすることになり、不安ではありましたが、少し考えたら自然とメロディーが思い浮かんできたので、自分が怖かったです。3日目は、指示する側にまわることをして、また不思議とメロディーが浮かび、音楽作りの楽しさを実感しました。最終日、子どもたちのイメージをふくらませることと、そのイメージを参考に、よりよい音楽にすることが難しかったので、次回こそできるように、来年に向けて頑張りたいです。

(声楽 / 1年)

・ 今まで即興で音楽を作ったり、合奏したりすることはやったことがなく、初めはとても苦手意識が強く、ついていくのが大変でした。でも逃げられない、やらなければならない状況に置かれると、今まで恥ずかしくて出すことの無かったものが、自分の中から少しずつ出せるようになっていき、壁を越えられた感覚がありました。また、外国人

の先生方と触れ合うことで、音楽は世界共通ということを実感しましたし、「自分」を出すことが苦手な日本人にとって、音楽を通して国際交流することは、とても良い経験になると感じました。

(声楽 / 4年)

・ 何もないところから、新しいものを作り出すのは、とても難しく、苦しかった。いっぱい考えているつもりが、全然何も出てこなくて辛かった。

(ヴァイオリン / 2年)

・ 本当に楽しそうでした。また今日一日で、素敵な音楽と振り付けまでできて、びっくりしました。音楽会に連れてきても、いつも楽器の体験を嫌がるのに、今日はリコーダーを吹いていました。音楽を作るってとても難しいイメージでしたが、楽しそうでした。専門の先生と一緒に、こんなに短い時間で、長い音楽を振り付けをして、ストーリーまで合っている曲を作ることができるのだ、とびっくりしました。
(保護者)

・ 初めてで、大阪からだったので「友達ができないかも」と、眉間にしわを寄せながら家を出たのに、楽しそうに手を振っている我が子にびっくり！演奏中も楽しそうに、吹いたこともないリコーダーを、楽しそうに吹いていました。しかも中央で楽しそう！絶対中央なんて自分から行かない子なので、びっくりです。ロンドンの先生と聞いていたので、少し心配していましたが、ちゃんと英語がわからなくても耳を傾けている姿に、本当に感心しました。
(保護者)